

1～3歳頃の自己と自他理解の発達 ：集団の発達の基盤を考える理論的整理

《日時》 2025年 5 月 24 日（日）
10:00～15:30

《講師》 木下孝司さん
(神戸大学大学院人間発達環境学研究科
教授)



《形態》 ハイブリッド開催（録画配信はありません）

会場：コラボしが21 3階中会議室
(滋賀県大津市打出浜2-1)

ライブ配信：ZOOMミーティング

《費用》 一般 6,600円
会員 3,850円
25歳以下会員 2,200円
※1999年4月2日以降生まれの会員
※同時入会で会員価格で受講できます



《定員》 100人

《申込》 QRコードから→



主催：人間発達研究所

電話：077-524-9387

Email：j-ih63su@j-ihd.com

2025.4.10

講義概要

私たちは、自己の意図・要求の実現を目指すとともに、他者との相互了解や協調を求める。それは時に葛藤を生じさせ、自他理解を深める契機ともなる。1～3歳頃、まさにこうした自他をめぐる状況が生じ始め、「自我の拡大」がみられる一方で、仲間とのつながりを求めるという二側面が顕著になり、仲間集団の発達を考えるのに、この二側面を統合的に理解する必要がある。

発達心理学の立場から、集団の発達は十分に扱えていないテーマである。その糸口を探るべく、本講義では、1、2歳児における自他理解を支える集団の発達の基盤について、理論的な整理を試みる。そのために、まず1、2歳頃の発達の特徴について振り返った後で、集団の系統発生と個体発達に関するTomasello, M. (2019) の共有志向性仮説を紹介する。そのうえで、保育などの実践現場における1、2歳児の集団形成を考えていくのに、共有志向性仮説を補完すべき要因について、これまでの発達研究の知見から確認していく。特に、「可逆操作の高次化における階層-段階理論」(田中、1987) や、「自己と『心の理解』の発達モデル」(木下、2008) などによって得られている知見によって、1、2歳児の集団形成に関わる要因を整理する考察を行う。

いずれも作業仮説の提案に留まるが、集団の発達をとらえるのに、個人の発達のどの側面に着眼したらよいのか、参加された皆さんと意見交換できれば幸いである。

タイムテーブル

10:00	開会挨拶 講師紹介	
10:05 └ 11:35	講義 1	①1、2歳頃の発達の特徴と集団形成の開始 ②Tomaselloの共有志向性仮説
11:35 └ 12:35	休憩	
12:35 └ 14:05	講義 2	①乳幼児期の「自己と『心の理解』の発達モデル」 ②1、2歳児における集団の発達の基盤（共有志向性仮説を補完する 要因：感染・同調、集団の境界、「いっしょに～したい」要求）
14:20 └ 15:30	講義 3	①集団の発達に影響を与える保育的要因 （大人を通した社会規範の取り込み、文化的魅力、物の特性） ②2歳児の集団づくりについて ③まとめと今後の課題
15:30	閉会挨拶	

講師プロフィール

1961年、鳥取市生まれ。京都大学教育学部、同大学院教育学研究科で学び、静岡大学教育学部助教授を経て、現職。

専門は発達心理学。著書は『乳幼児期における自己と「心の理解」の発達』（ナカニシヤ出版）、『「気になる子」が変わるとき：困難をかかえる子どもの発達と保育』（かもがわ出版）、『子どもの心的世界のゆらぎと発達：表象発達をめぐる不思議』（共編著、ミネルヴァ書房）、『心の理論：第2世代の研究へ』（分担執筆、新曜社）、『新版 教育と保育のための発達診断 下』（共著、全障研出版部）、『新・育ちあう乳幼児心理学：保育実践とともに未来へ』（共編著、有斐閣）など。

参考文献（事前の学習は不要です）

- 木下孝司（2008）乳幼児期における自己と「心の理解」の発達 ナカニシヤ出版
- Tomasello, M. (2019) Becoming human: A theory of ontogeny. Harvard University Press（トマセロ, M. 大藪泰（訳）（2023） トマセロ 進化・文化と発達心理学：人の認知と社会性の個体発生をさぐる 丸善出版）
- 田中昌人・田中杉恵（1984）子どもの発達と診断3—幼児期Ⅰ 大月書店